### 特別編

# 2 伊藤信吉と「多喜二奪還事件」

伊藤信吉の「多喜二奪還事件」との関わりは、次の回想が有名である。

起きていたのである。で披露できたかどうか。いや、メッセージ披露なぞどうでもいいような、こういう事件が現地でで披露できたかどうか。いや、メッセージ披露なぞどうでもいいような、こういう事件が現地で一つジをあずかってゆこう」と言われた。それでメッセージを書いた覚えはあるが、果して伊勢崎」当時私は雑誌『ナップ』の編集をしており、中野重治から「君の郷里の講演会だから、メッセー

編集実務担当の信吉とは日常的に関わりがあった。紹介した後に出てくる。当時中野重治は機関紙『ナップ』の編集長に就き、る。「奪還事件」で多喜二を迎えた小林邦作と信吉がどういう知り合いで、七 一九三六・一一」の「2」の「群馬県の左翼運動・その断片」に出てくこれは『回想の上州』(一九七七年)の「青春の起伏の終焉 一九三二・

次に、その機関紙『ナップ』の十月号の編集後記の一部を紹介しよう。

の字も出はしなかつた。プロレタリア藝術運 事實は作家同盟員の三人が無理由に檢束され めたことがパクロした伝々と書き立てたが、 聞はナツブの作家同盟が、九月六日の國際無 テマカンパは、ナツブの活動が活酸になり大 武器となることだ。プルジョア新聞一せいの 衛そのものが勞働者階級の文化戦線における 動に必要なのはピストルや棍棒ではなくて藝 即時戻つて來ただけであつて、ピストルのピ **廣青年デーに参加するためにピストルを集** プに闘する記事はその一つの現れだ。プル新 地方のブルジョア豁新聞に砂装されたナツ も一段と悪×になつて來た。九月十三日東京 はじめたので、これに對する安配階級の防× よび一般勤勢者の大衆的基礎の上に再建され ナツプ各同盟の仕事が一せいに勞職者な

切りはなすために、蒸衛運動が何か兇器をたづさへて暴行するものであるかのやらに見せがはふくとした敵階級の×策であることを暴いしたばかりでなく、プロレタリア藝術が事際したばかりでなく、プロレタリア藝術運動はそれをこえて進むであらうが、わた野野の登展を示す時計の針のやうなものであり、また彼らがデマを飛ばすぎあらうし、そのため、ますます大衆の生活と密接に結びそのため、ますます大衆の生活と密接に結びそのため、ますます大衆の生活と密接に結びそのため、ますます大衆の生活と密接に結びそのたが、ますます大衆の生活と密接に結びそのたが、ますなどものである。

ことに通じるのか不思議である。その「ブル新聞」の報道を確認してみよう。の全体像を東京朝日新聞が報道した。どこから「ピストルを集め」るという時戻って来た」とあるが、東京では文芸講演会の弾圧を読売新聞、奪還事件「九月六日の国際青年デー」に「作家同盟員の三人が無理由に検束され即

# 暴露された!

# ナップの秘密計書

ころ去る三日午後二時ごろは残る とろ去る三日午後二時ごろは残る 全町下等台四大〇プロ機会助出る 全町下等台四大〇プロ機会助出る 会町下等台四大〇プロ機会助出る。 第でプロ機会会が山台、口奏、 都が第三人様が多か出る。 は個大、整地互の出版が秘熱や台 は個大、整地互の出版が秘熱や台 は個大、整地互の出版が秘熱や台 は一貫に横奏し一型を開放した が終末の文実験から東に行動隊 を引線しば難に後面した の時間となくもナップの加密膜 数が変素の文実験から東に行動隊 を引線しば難に後面した の時間となくもナップの加密膜 数が変素の文実験から東に行動隊 を引線に一貫に横左翼標をとの地各 の時間となくもナップの加密膜 数が変素の文実験から東に行動隊 を引線にあるのを無異数様を裏見が探 からました。 の時間となくもナップの加密膜 数が変素の変変験がらまたが を引きため、 の時間となくもカップの加密膜 数が変素を引きため、 の時間となくもカップの加密膜 数が変素をとの地名 の時間となく の時間となく の時間となく のも表大質を関きたの地名 の時間となく の時間となく の時間となく のもをとの地名 の時間となく のもをとの地名 のもをとの地名 のは、 のもをとの地名 のもをとの地名 のもをとの地名 のもをとの地名 のもをとの地名 のもをとの地名

次の資料は、『中野重治全集・第二七巻』の「解題」である。である。次に編集後記は編集長の中野重治が書いたかと思うと違うようだ。無根の捏造された内容だが、「奪還事件の余波」がナップに飛び火したわけこれは「東京日々新聞」一九三一年九月十三日の記事であり、全く事実

は伊藤信吉文であることがわかつたので、この全集からは取りのぞいた。雄誌の編集後記はみな旧版全集第十九巻に初収。旧版全集におさめられていた「『ナップ』|九三|年十月号編集後記

との関わりがより一層強まった。 つまり、十月号編集後記は伊藤信吉の文という結論になり、「奪還事件」

# 3 二つの「飴玉闘争」と「奪還事件

に (一九三一・一二・一四) とある。 とある。もう一つは『 同 全集・第五巻』の「監房随筆」の二つのエピソ 林多喜二全集・第三巻』(一九八二年)にあり、末尾に(一九三一・七・四) ドのうちの一つで、「飴玉闘争」とエピソード名が付けられている。 末尾 多喜二の「飴玉闘争」は二つあるというのは常識なのだろうか?一つは。小

次に「私」は朝鮮の同志のいる隣房へ移される。ここで彼が、「私」の要求 房に「効め」(ききめ)が波及し、ここで看守に「共産党にはかなわん!」 玉闘争」を振り返っており、ここの叙述は前者のものと大差がない。他の監 貫して「私」を軸に展開する。日向ぼっこの要求をしたところで、自らの「飴 る。他の同志に効果が波及した際にも、「俺」と「看守」の会話があり、 と、国際連帯も意識した、より一層深い波及効果を描いている。 と同じく、「人間も天日にさらされてくれんと云っている」ことがわかり と言わせているが、前者の個性を持った看守と違い、一般的な看守である。 の効果を「看守」の口から「みんな真似して」と言わせている。後者は、一 「暇があるとヨクしゃべりに来る看守」との会話を軸に飴玉闘争が展開され 「私は思わず微笑ん」でいる。また彼が「組織的に後をつけてくれている」 この二つの「飴玉闘争」は基本的に全く別の作品である。前者は「俺」と

この小篇は『独房』の一部である。」とあるが、後者は「見ろ!と思った。 以上の違いに加え、最後を比較するとさらに大きく違う。前者は「

抗議行動を展開した時の、多喜二の姿を彷彿させるものがある。次の二つの た。」である。後者の「私は床をドン | 節には、「 多喜二奪還事件」の際に、留置所の内と外で呼応して、激しい 飴玉闘争」を読んだ後に、村山知義の多喜二の回想を読んでほしい。 同志とはこういうもんだ!私は床をドン と踏みならして応援した。」という と踏みならして応援し

### 飴 玉 闘

くるすえた沢庵二片とお湯が一杯しかない。それで東京の留置場に入れられたときには、そこが明 これは極楽だなと思った。それであまり燥いで、どなりつけられてしまった。 誰でも初めての監房に入れられて、ガチャンと錠をおろされる時に感ずる暗い気持とはまるで逆に、 るくて、風通しがよくて、白い飯で、味噌汁が飲め、魚も時には食えるので、俺はその意外さに、 **澱んだ腐った空気の底に、みんながうでめいているのだ。ではんはボロ~~な麦飯で、胸へゲーと** 大阪の留置場は半分地下室に埋まっていて、窓もなく、昼でも赤ぼけた電燈がついている。その

パリして、綺麗なので、思わず入口に立ち止まって、キョトくくしてしまった。 んだと云われて、それが床の低いジュク~~した長屋の自分の家とは比らべものにならない程サッ 「何してるンだ。さッさと入るんだ。」 小樽の「三・一五」の同志で、日雇の浩湾労働者が刑務所に廻わされたとき、此家に入っている

## と、看守に後から突かれた。

ように、俺ばかりではなく、中にいるわれく、のどの同志もそうなのだ。廊下で他の「編笠」に会 で読んだりしていた処とはおよそちがって、そこは呑気な処だということが分った。前にも云った ならなかったと云った。――俺は然し負惜しみを云っているんだと、その時思ったものだ。 だが、俺もT刑務所に廻った時、その仲間が云ったように、ほかの人から聞かせられたり、もの その仲間が出てきてから、中にいた時には、何よりあんな家に住んでる嬶や子供の方が可哀相で

ハネ上げ、肩を振り、大股に歩いているのは、全く間違いなく同志だった。 っても、それがわれくくの同志か、それとも他の強盗かコツ泥か直ぐ見分けがついた。編笠を後に 俺のとてろへ、暇があるとヨクしゃべりに来る看守が一人いる。刑務所には、きまってこういう

う附け焼刃のような一生懸命力んでいる無理を感ずるんでね……」 当のことを云えば、それにはそんなにこっちはこたえないんだ。その君たちの努力には、何ンかこ 種類の看守が一人位はいるものだ。それが何時かこんな事を云ったー 「君らには獄内闘争というものがあって、絶食同盟をやったり、一せいに皿をわったりするが、本

俺は馬鹿らしくて、聞いていなかった。然しその時面白いことを附け加えた。

俺たちの方が、どっとい勝負では負けているということが分るんだ。――これだと、結局俺たちが 否気そうにしていることなんだよ。こいつをみせられると、君たちをつかまいて得意になっている 君たちにせゝら笑われながら、無駄な骨折りを永久に繰りかえしていることになるんだからな。」 「ととろが、何より恐ろしいのは、君たちをいくら此処へ押し込めて置いても、君たちが何時でも

「じゃ、俺なんて恐れられてるわけだな。」 俺はそう云って、笑った。

なり、彼奴等を平然と尻目にかけてやらなければならない。 だが、全くこれとそ最大の獄内闘争だったわけだ。――よろしい、俺はこれからモットく~否気に 今迄、誰も獄内闘争と云えば、「否気にしている」ということもそうだとは考えてなんかいない。

ところが、その頃別なことが起った。

えないので、それをしゃぶりながら本を読むにはこの上もないものだった。 俺は一日置きに五銭ずつ飴玉を買っていた。飴玉はキャラメルよりも安いし、一口に食ってしま

必要以上にポラれているわけだ。 がまずくて高価かった。ほかりが、日によって数がヒドクまちくくだった。上一俺たちは此処では 一体、この中で買うものは、それがどんなものでも外のものとは比らべものにならない程、品物

「担当さん。」

むずかしい、面倒臭い顔をした。 俺は標示器をカタンとおろして、看守に所長面会を申込んだ。それをきくと、担当の看守は急に

「用件は何んだ。」

「飴玉の件について……」 俺は重々しい調子で云った。

アメダマ!?……」

なければならないんだ。 「おい、おい?」――看守は怒った声を出した。「此処をどこだと思ってるんだ、フザけてる!」 俺は飴玉について詳しい説明をしてやった。看守にはそれを拒む権利も理由もないので、取次が

一々やって来てもらっては困るんだ。」 「君、とっちも色々と仕事があって忙がしい んだから、そンな――飴玉の大きいや小さいやで、

所長は自分の威厳を侮蔑されたように不機嫌な声を出した。

俺は云った――「此処では、飴玉の大きい小さいが大問題なんだ!」

面目さをもってやった。それに一日のうち兎に角独房から一度でも余計に外に出られるということ そして殆んど毎日のように飴玉のことで所長面会を続けて行った。俺はそれを非常な几帳面さと真 は、却々貴重なことなんだ。 かけるように一々手にとって丹念に検査をする。この仕事は独房のなかでは一つの楽しみだった。 それから俺は「購求」の(中ではそう云っている。)飴玉が入るたびに、それをまる で顕微鏡に

「何ンだ、又今日も飴玉か?」

るんです。」 「そうです。今度数の方が多くなったと思って安心していると、大きさが今迄のより小さくなって

負けをしてきた。俺は飴玉のことで、十五日間は通った。 終いには、所長はだまってにらみつけるようになった。そして、その次にはだんく~向う側が根

> か、昨日より一つだけ数が足りなかったからだとか話して行くことにした。それをクドイ程毎日の きな声を出して、飴玉にワラ屑が入っていたから今日面会してくるんだとか、質がおちたからだと 行きかえりに繰りかえした。――この方法は、ところが五日も経たないうちに、美事にそのきゝめ をあらわし出した。 俺はこのことを繰りかえしているうちに、新しい方法に気付くと、それをつけ加えて行った。 房を出て所長室へ行く途中、他の同志の入っている監房の前を通る時は、何時でも成るべく大

「君は悪いことを始めたよ。」

と、看守が小さいのぞきから、そんなことを云った。

「へえ、覚えがないがな……?」

「覚えがないもないさ。みんな真似して!」 俺は室のなかの体操をやめて、袖に手を通しながら、ニャーへのぞきに寄って行った。

俺はそれで分った。しめた、と思った。

へえ……?」

看守は云った―― こういう事は職掌柄云っていゝことか、悪いことかと、少しためらいながら、然しこの話好きな

会を申込む。一回で駄目だと、三日も四日もつゞける。やれ味噌汁の中に虫が浮かんでいたと云っ て、それを丁寧にワザく~のけて置いて、そいつを持って面会にやって行く。やれ室が暗いから転 「お前があんなことをやり出してから、やれ皿のふちがかけたから直ぐ取りかえてくれと云って面

ゃな問題を取りあげても、それはキット押し広がり、統一的な全般の問題にまで進んでゆくんだ。 房させてくれ、やれ発声運動を許可してくれ、やれ如何なる理由であの本が差入不許可になったか れが愉快だった。 然し、とにがく、飴玉というこの搦手から彼奴等がマンまとしてやられたのだと思うと、何よりそ 説明してくれとか……大変なことが流行ってしまったものだ。——君たちにはかなわんよ!」 「アメダマ」ーーこの円るい、ユーモラスな、子供の日の夢を想い出させる飴玉が、然し事もあろ 俺は口笛でも吹いてみたい程、内心ウキノーした。こと飴玉と云う勿れ、俺たちはどんな小っち

うに、厳めしい「獄内闘争」(1)などゝいう事と、どうもこう一緒に考えられないではないか! 附記。この小篇は「独房」の一部である。

(一九三一・七・四)

### 監 房 随 筆

### 飴 玉 闘

して東京の冬がやってきた。 鉄棒のはまった窓から空を見ていると、その青さがダンく~乾いた青さになってゆくのが分りそ

秋しか知らないので、窓の赤い煉瓦にクッキリと区切られてみえる東京の秋を見ながら、外にいて、 せめてその空の下を歩いてみたらと何べん考えたか知れない。 みてから死にたい……」と書いていた。私は冷たいビショく~雨が来る日も来る日も降る北の国の 或過去の小説家が、その自殺の手紙の中で、なみく~ならぬ実感をこめて、「せめて、日本の秋を は、ちっとも冬だという気がしない。それは何んだか「冬の玩具」のようだった。― けれども、それは飽くまでも「東京の」冬であって、北海道に二十何年も暮してきた私にとって

みと身のまわりを見回してみる。 人は秋が来ると、独房の中に坐っている自分の姿を初めて鏡か何かで見せられたように、しみじ

晴れた日が続くので、一週間一度の蒲団の日干を二度もやる、雑役が小さい覗きを開けて、眼だ

と云って、パチンとしめて行く。

「蒲団の用意――ィ!」

青空の真ッ下で日向ぼッこの出来る蒲団をさすって、

私は窓の下の片隅に積み重ねてある蒲団をほぐして、廊下に運び出せるようにしながら、一日中

「といつは俺より幸福ものだ!」

と思った。こゝでは、そういう事を本気で考える。

向う端の方から順次に扉が開いて、ドッコイショと、蒲団を出している。

「十八房、蒲団!」

ガチャンと扉が開いた。

私は蒲団を運びながら、

「看守さん、所長へ面会の手続をとってくれ!」

と、真面目くさった顔をして云った。

で、看守たちの神経がピリー~しているのだ。 取りながら、どんな小さい事についても一々「所長面会」をやって、待遇改善の獄内闘争をやるの 担当の看守が思わず眼をキョロッとさせた。共産党事件で入っているものは、監房々々で連絡を

看守は掌の上で、鍵をカチャく~させながら、今度は頼むような顔色をした。

「飴玉闘争じゃないよ。」私はニャリとした。

「蒲団より人間の方が大持てだから、日向ぼっこさせろと云うんだよ。」

私は且て「飴玉闘争」というのをやったことがあったのだ。

むにはこの上もないものだった。 「購求」と云っている。)飴玉はキャラメルよりも安いし、それをしゃぶりながら独房の中で本を読 - 私はこゝの刑務所に入ってから、一日置きに五銭ずつ飴玉を「購求」していた (刑務所では

まずかったりするのである。私たちは此処へ来てまで必要以上にボラれているわけだ。 比らべものにならないほど品物が高くて、ばかりか日によっては数がヒドクまちく~であったり、 ところが、此処で購入すると、キット間で「頭をハネている」ものがいるらしく、外のものとは

それで私は「所長面会」を看守に申込んだ。

「何の用件だ?」

看守はむずかしい、面倒臭い顔をしたものだ。

「飴玉の件について。」

私は重々しい、ゆっくりした調子で云った。

「アメダマ?……えゝ?」 看守には分らなかった。

「おい、おい!」

私は飴玉について詳しい説明をしてやった。看守には拒む権利も理由もなかったので、所長に取 看守は怒った声を出した。「此処を何処だと思ってるんだ、フザけてる!」

次がなければならなかった。

「君、こっちも色々と仕事があって忙がしい んだ から、そんな――飴玉の大きいや小さいやで、

次の日、私は所長に面会した。

一々やって来てもらっては困るんだ。」

私は云った――「此処では、飴玉の大きい小さいが大問題なんだ!」 所長は私の思いがけない用事で、自分の偉厳が軽蔑されたような不気嫌な声を出した。

単調さが救われるので、とゝではなかく~貴重な仕事だった。 けて行った。それにこれをやっていると、兎に角一度でも余計に外へ出られるし、それだけ一日の る。との仕事は独房の中では一つの楽しみだった。そして毎日のように飴玉のことで所長面会を続 それから私は購求が入る度に、それをまるで顕微鏡にかけるように一々手にとって丹念に検査す

「何んだ、又今日も飴玉か?」

「そうです。数の方が多くなったと思っていると、今度は大きさが今迄より小さくなっているんで

終いには、所長はだまってにらみつけるようになった。そして、その次にはだんく~向う側が根

運動を許可してくれとか、やれどんな理由で差入本が不許可になったか説明してもらい たいと か れを丁寧にチリ紙の上に載せて持って行ったり、やれ室が暗いから転房さしてくれとか、やれ発声 壊れているから直ぐ取り換えてくれとか、やれ味噌汁のなかに虫が浮いていたからと云っては、そ 五日もしないうちに効めをあらわした。他の監房でもこの飴玉闘争に刺戟されて、やれ皿のフチが 数が足りなくなっているから談判するんだとか――それを繰り返えしたのだ。すると、この方法は っていたから所長に面会するんだとか大きさが小くなったからやって行くんだとか、昨日より一つ ……私たちの入っている「南房」では勇敢な闘争が起ってしまった。 然しこれだけなら、何もそれは闘争でも何んでもなかったのだ。ところが、私は所長室へ行く途 他の同志の入っている監房の前を通るときに、成るべく大きな声を出して、飴玉にワラ屑が入

「共産党にはかなわん!」

ーモラスな、子供の日の夢を思い出させる可憐なものが、事もあろうに「獄内闘争」の火蓋を切っ たということである……。 看守も終いにはそう云った。然し何より愉快だったことは、「アメダマ」というこの円るい、ユ

理矢理私を押し込んで、隣房へ行ってしまった。 それで看守たちは想像以上にビクー~ものなのだ。——私が又そんなことを云い出したので、無

故里の家の行方も分らず、東京では互に非合法場面で仕事をしながら捕かまってしまったので、同 隣房は朝鮮の同志で、時々の通信や、運動や入浴の帰りに扉の前を通りながら話すことなどから、

出来たが、との朝鮮の同志には一度だって外から差入があったためしが無く、購求をしたこともな 「青い着物」を着、青い蒲団を敷い てい た。私などは時々差入があったし、果物やお菓子の購求も った時には隣の房の同志のことを考え何べんか気がひけた。 かった。殊に差入や購求は、何処そこの房にあったということが手に取るように分るので、私にあ 志でも彼のことを知るものが なく何処からも差入が無いという ことが分った。それで未決なのに

私は何時か入浴の帰りに、看守の眼を盗んで、扉をたゝきながら、

「大丈夫か? 元気か?」

と云った。

「タイショウプ」

すると、中から、

朝鮮人らしい濁らない発音で云い返して寄こした事があった。

云うのをきいていて、直ぐ組織的に後をつけてくれてるのだ! い、人間も天日にさらさせてくれんと云っているのだ。——私は思わず微笑んだ。彼はさっき私が その隣房の同志は、蒲団を出しながら何か云っている。フト耳をそばだてると、蒲団ばかりでな

「何んだ、モウ十八房が云ったことを聞いたのか?」 見ろ!と思った。 ―同志とはこういうもんだ! 私は床をドン~~と踏みならして応援した。 一お前らにはホトく~参るよ!

### お頭付きの正月

の気持をおかしな程ときめかした。――もう正月が近いのだ。 て洗ったりし始めた。そういう少しでも何時もと変ったととが、独房に坐りこくっているものたち 十二月の二十五六日になると、雑役が廊下の床にたわしをかけたり、一々監房の窓硝子を外ずし

正月であろうが、殊に「運動」をしている私たちにとっては、それは何んの変哲もないことなのだ。 や小さい妹が、そとだけが空いている私のところを見かえり見かえり時々箸を休めている姿を思い 汁を思い出す。吹雪いている北国では、私の分をもちゃんと揃えて、テーブルのまわりに坐った母 だが、フトとすると、「世の常の人のような」感慨にふけっている自分に気付いて、私は苦笑した。 出すことが出来るのだ。 監獄で正月を迎える! それは私には初めてのことである。然し監獄の正月であろうが、何処の -もの心ついてから、三十一日の「歳取り」と云えば、私は荒巻きの焼いたのと大根を刻んだ鯨

その日、「どうだい、大晦日の感想は?」

ないかな?……」 暇な看守が「覗き」からそんなことを云った。――「さすがに心の乱るゝを覚ゆってところじゃ

「どう致しまして!」

私は無愛そに云いかえした。

フン……?

―看守は「どうかな」という顔をした。

で、今でも思い出せるのである。 に働いているのだということが強く頭にきた。——然しそれが如何にもその頃の私らしいことなの のことでアクセク駈けずり廻わっているのに対して自分はそれとは段違いに高遠? なことのため が、何かての上もない皮肉なことのように考えたことを思い出せる。殊にそれは他人がたった眼先 でトットコ歩きまわっていると思っているだろうが、どっていそんなものじゃないんだということ ていた。その為に私は目だゝないので非常に都合がよかった。私はその時他人は俺をも借金のこと にならないととても歩けそうにもない程吹雪いていたのだが、大晦日なので人はしきりなしに歩い クションとして、全協の小さいグループの責任者に重要な連絡を取るために吹雪の中を労働者の住 ハッキリ思い出すことが出来る。私は新労農党系の労働組合内の反対派活動をしていた。そのフラ んでいる街から山の手のアジトへ歩いて行っていた。真正面から吹きつけてくるとそのまゝ後向き 特に「大晦日」という日なので、私は昨年の大晦日に自分がどんなことをしていたかという事が

着だった。私はあの追いかけられた時、モウ三分間!(五分間までは要らなかった)頑張れゝばよ ワクく〜と激しく感じ出した。それは自由に歩き廻わり、自由に仕事の出来た外の世界に対する執 夜を、借金のことしか考え事にない者どもを石ッころみたいに黙殺しながら何処かへ重大なレポを かったのにと思うと、かえすど〜も情ない気がした。そしたら私は又昨年のように、との大晦日の 運動も済み、晩飯も終って、黄ッぽい電燈の下に坐り込むと、私は外の生活に対する執着を急に

運んでいたのだ!

後の音」である!である!でも、よく聞くと十文字に向い合っている北房の方でも、よく聞くと十文字に向い合っている北房の方でも、たゝいているらしい。一九三〇年の「最就褒の鈴が鳴った。すると、一せいにみんながコンクリートの壁をたゝき出した。階下でも階上

私はこの壁をたゝく音が、監獄の「除夜の鐘」であると思った。

私は「世の常の人」だろうか、床に入ったのだが、何時ものように、私はそんなに直ぐには寝つ九三一年の朝になっていた。

看守は元旦なのか、黙っていた。――気のせいで、寒い朝である。秒の三分ノーも早くも遅くもなく、壁をたゝき出した。それは毎日の朝よりも長く、長く続いた。起床の鐘が鳴ると、皆はそれよりも一時間も早く起きて待ち構えていたかのように、鐘の音と一

朝飯の時間に、

「茶碗とお皿の用――意!」

と、向う端で叫ぶのが聞えた。

ないが)を出すのかと思うと、腋の下に手を突ってまれたような擽ぐったさを感じた。あることを意味しているのである。刑務所でも正月だと云って、お馳走(それがどんなものか知ら大抵の朝は、茶碗かお皿のどっちかで、茶碗とお皿の用意ということになると、それはお馳走の

「ハー・ニルアを持いい」、「対ラ、ガラッと、一つ一つの監房の前に止まりながら飯車が近付いてきた。丁度向い側では、ガラ、ガラッと、一つ一つの監房の前に止まりながら飯車が近付いてきた。丁度向い側では、

と云っているのが、聞えてきた。「へえー」とれア素晴しい!」

「それ、お頭付!」

雑役が笑った。

「それ!」

雑役が慣れた手付で、調子をつけた。

る程!」と、ニャッとした。 見ると、数の子、昆布、お雑煮、「お頭付」の小さい平べったい鯛が揃っている。 ―

一私は「成

「どうだい?」

看守が笑って、私を見た。

「仲々やるもんだ!」

「お目出度づくしだろう。案外、有難いものだろう?」

[.....°]

途中でそれをやめさせてしまったということである!に何時でも最初にならす音楽が響き出したとき、突然どの監房からも壁をたゝき出して、とう~~最後に附け加えておくが、この元旦のお屋に蓄音器をならして聞かせた。ところが、こういう時

私たちは、そして新しい年の闘争を誓った。

(一九三一・一二・一四)

多喜二は一刻も黙っていない。 多喜二は一刻も黙っていない。 を関い、朝、一同上野駅から立った。芝居の幕開き前に講演する筈の多喜二と中野重治になり、朝、一同上野駅から立った。芝居の幕開き前に講演する筈の多喜二と中野重治になり、朝、一同上野駅から立った。芝居の幕開き前に講演する筈の多喜二と中野重治になり、朝、一同上野駅から立った。芝居の幕開き前に講演する筈の多喜二と中野重治した。ところが上野を出て暫くすると、或る駅から主催者の農民組合の人が乗りも同行した。ところが上野を出て暫くすると、或る駅から主催者の農民組合の人が乗りも同行した。ところが上野を出て暫くすると、或る駅から主催者の農民組合の人が乗りも同行した。ところが上野を出て暫くすると、或る駅から主催者の農民組合の人が乗りも同行した。ところが上野を出て暫くすると、或る駅から主催者の農民組合の人が乗りも同行した。ところが見かれているころ、立ているころになり、朝、一同上野駅から立った。芝居の幕開き前に講演する筈の多喜二と中野重治になり、朝、一同上野駅から立った。芝居の幕間も前に講演する筈の多喜二と中野重治になり、朝、一同上野駅から立った。芝居の幕間を前橋、高崎地方へ持っていくこと

「署長を出せ!何で俺たちをこんな所に入れた?」

「署長はもう官舎へ帰った。」と巡査がいう。

「それなら官舎へ行って連れて来い。そんな無責任なことがあるか?」

私たちを釈放してしまった。二には及ばない。とうとう、一時間あまりで、巡査も持てあまして、署長に相談して、上には及ばない。とうとう、一時間あまりで、巡査も持てあまして、署長に相談して、と、多喜二は丸太を叩き、床を踏み鳴らし、あばれる。中野と私もやるが、到底多喜

\*村山知義「多喜二の思い出」から (「東京芸術座公演パンフ」所収、一九六八年)

可能性を与える。「一時間」は「一晩」と受け取ってほしい。多喜二たちはン と踏みならして応援した。」は実に似ており、同じ体験を基礎にしたこの「多喜二は丸太を叩き、床を踏み鳴らし、あばれる」と「私は床をド

を菊池(小林邦作)の文章で見てみよう。民衆側と官憲側の交渉は知らなかった可能姓はあるだろう。次に、同じ場面民衆側と官憲側の交渉は知らなかった可能姓はあるだろう。次に、同じ場面

たり、『早く出せ!』『演説会を潰すつもりか?』などと怒鳴ったりした。ぜられた。留置されている方も、それに勢いずいて、足をバタバタして床を踏み鳴らしその頃から、伊勢崎署の周辺はだんだん騒しくなってきたのが、留貴所の中からも感

私は演説会がどうなったか、心配でならなかった。

痛の面持ちのように見える。外に警官の姿は見えなかった。 イが、内から鍵をかけ、椅子に腰をかけているのが、私の房から見えた。何か心なし沈ら四上力を警察当局にかけていることは、たしかである。留置場の入口には、一人の番当の圧力を警察当局にかけていることは、たしかである。留置場の入口には、一人の番当の圧力を警察当局にかけていることは、たしかである。留置場の入口には、一人の番当の圧力を警察当局にかけているとは、たしかである。留置場の入口には、一人の番当の正力を警察当局にかけているように感じられた。押しよせた群集は数まるに従って外の様子は、いよいよただならぬ気配が感じられた。押しよせた群集は数まるに従って外の様子は、いよいよれただならぬ気配が感じられた。押しよせた群集は数まるに従って外の様子は、いよいようで、複の闇が深まるに従って外の様子は、いよいというである。

しかし私は感激のあまり、その第一節すら、満足に唱い切れなかった。のを覚えた。外の声はI・W・Wの歌に移った。モチロン、留置所もこれに呼応した。らも力強い革命歌が漏れた。こんなことは、かって私の経験したことのないことである。中からも、期せずして、外の声に合せて革命歌を唱い出しだ。私も、唱った。他の房か中からち、外からよく揃った革命歌の合唱の声が響いてきた。これをうけて留置所の

\*菊池 (小林) 邦作「伊勢崎署占領事件」から (随筆『柿』所収、一九六七年)

> 先に成ってしまいました。 資料集 」として出す予定でしたが、「『多喜二奪還事件』資料集 」の本書が版として「『多喜二奪還事件』の記録・回想・講演集」を「『多喜二奪還事件』【あとがき】昨年の『伊勢崎署占拠・多喜二奪還事件資料集』より一年。改訂

るとともに、お二人に本書を捧げます。慶吾氏は、ご逝去なされ、本書を渡せず残念でなりません。お悔やみ申し上げ善故菊池敏清氏の次女の石田京子さん、自伝『挑戦の人生』を出された小野寺

伊勢崎市、 子樣、早瀬演樣、細井寿男樣、相川之英樣、 正様、小林進様、小林悟様、平山知子様、菊池兵吾様、宮沢規子様、菊池利根 立図書館、 究会会長桑原稔様、熊倉浩靖様、岩根承成様、一倉喜好様、石原征明様、菊池 土屋文明記念文学館館長岡田芳保様、主幹唐澤龍三様、主幹小林澄子様 日本共産党伊勢崎佐波地区委員会、 元白樺文学館・多喜二ライブラリー 佐藤三郎様、愛敬浩一様、群馬県文化財研 多くの方々にアドバイスやご教示を受けました。本当に感謝しております。 蛎崎澄子様、長久理嗣様、 原秀三郎先生、市原壽文先生、伊勢崎・多喜二祭実行委員会の皆様 群馬県立文書館、 群馬県、 上毛新聞社、 群馬大学図書館、 長澤初江様、滝川哲雄様、石川繁生様、丸 群馬県立図書館、 同 伊勢崎市議団、 前沢哲也様、児島学様、藤田廣登 群馬県立女子大学附属図書館 前橋市立図書館、 同 群馬県委員会 伊勢崎市

2009年9月6日初版多喜二奪還事件」の文学的前提 群馬プロレタリア文学の発見とその展開

編集・解説】長谷田直之(伊勢崎・多喜二祭実行委員会事務局)

【出版・印刷】伊勢崎・多喜二祭実行委員会

372 0051 群馬県伊勢崎市八幡町44

メール

haseda@azuma-toshin.co.jp

表紙印刷・製本】川島美術印刷株式会社WEB http://www.takijidakkan.com

ISBN978-4-99048-190-2 C0095

を 落丁・乱丁がありましたら おとりかえ致します。

# 中一の大学的問語

「多客」「奪選事件」資料集日

一 群馬プロレタリア文学の発見とその展開一









「多喜二醇選事件」の文学的前提 ― 群馬プロレタリア文学の発見とその展開

## 1931 (昭和6)年9月6日の国際青年デー。 『蟹工船』の小林多喜二が 群馬にやってきた!

プロレタリア文学は群馬にあったのか? 誰が小林多喜二を呼んだのか? なぜ群馬にやってきたのか?



**讨に生まれ、小林家に婿養子し、** 経て『蚕糸絹情報』発行、晩年 こ大著『徴兵忌避の研究』刊行。 戦後は疎開先の松本で共産党再 建に貢献。上京し、潮流社等を 1899年~1986年。佐波郡茂呂 蚕糸公論』発行。戦中に復籍。 東京高等蚕糸学校へ。卒業後、 無産運動に尽力。『上毛大衆』 主筆。奪還事件以後、前橋で (有他) 有他



会員として、地元で『戦旗』の 普及に努め、奪還事件を迎える。 東京帝国大学文科へ。ナップの 半年後には徳永直等を招き、反 尹勢崎民主新聞を発行し、地域 村に生まれ、旧制浦和高校から 建国祭闘争を指導、戦中に無償 .909年~1994年。 佐波郡茂呂 の民主的文化形成に貢献した。 で農地解放。戦後は『民論』、 菊池敏清

## 【群馬県立図書館所蔵】



茂呂村の菊池敬清宅 [赤旗編集局提供]



伊勢崎町の共楽館 【丸~瀬店提供】



伊勢崎警察署仮庁舎 【伊勢崎市立図書館提供】

川島美術印刷株式会社 伊勢崎・多喜二祭 [表紙印刷・製本] 【出版・印刷】 [編集・解説] 実行委員会 長谷田直之



192009501000

ISBN-978-4-99048-190-2 C0095 ¥1000E

定価(本体1000円+税)